

<連載>

ザイコロジー

⑤

そだちと臨床研究会

川畑 隆

児童相談所に就職してから

就職してから、障害のあるかたが書いた詞に曲を付けて歌う「やすらぎ音楽祭」のボランティアをやり始めたので（有名な「わたぼうし音楽祭」とは別物です）、自分で歌詞を書く機会が減って書いた数は多くありません。それに書くために書いた無理やり感があって、⑤⑥に載せるのはそれが比較的薄いものです。そういう意味では、高校・大学時代が一番ストレートに歌詞が作れたと言えるんでしょう。

学生時代を引きずっているようなものを3つ続けます。

やさしい人

やさしいと言われるのが嫌だ
そう思いながら やさしい人になっている
やさしいという言葉に疑いを持ちながら
やさしさに終わってしまっている
そんな日々にくるまれながら
殻を破れない

自分の中に激しさがある
その激しさを加速させる無鉄砲さもある
突き進んでゆく激しさに身を任せたあと
その影響が確かに自分に迫ってくる
衣を脱ぎ捨てた潔さと 冷たい風と

自分の激しさを讃えている自分がある
でも ふと放心している自分も見つける
激しさの代償が不安になって
心の片隅で暗さに突き進んでゆく
やさしい人であることの安全性が
足を引っ張っているのだろう

自分に起こる様々な波風を
ごく日常の生きる鼓動と受けとめたい
けっして鈍感になって何も感じない
そんなことを望んでいるのではなく
自分に起こっていることを
楽しめるようになりたい

そして そんなふうになれば
殻破りは確実に進んでいるのだと思う
ひとつひとつの積み上げは
こだわりと激しさと

G式

G式ってなかなか解けないもの
G式ってなかなかやっかいなもの

足せば足すほど動きはつかなくなるし
引けば引くほどめちゃくちゃになるし
括弧で括っても何もかわらないし
無限大に途方に暮れる
ああ G式は自分ひとりで
やらなきゃいけないし
G式は誰も手伝ってくれない

G式というやっかいなしるものを
引っ張り出すのもすなわちG式

かければ立派にできそうな気がして
割れば割るほどわからなくなるし
因数分解すれば残るのは半端な数字
集合ではうごめく記号の氾濫
ああ G式がなかったら困ったもんだし
G式にとらわれても困ったもんだ
G式をどうかしようなんて
さらにG式を面倒にするだけ

ああ G式っていう目障りな奴だけど
嫌々つきあってやるしかない
G式ってなかなか解けないもの
G式ってなかなかやっかいなもの

ほっといてよ

あたし 何も悪いことしてないよ
だからさあ そんなお説教はやめてよ
あんたの思いどおりには 私
生きたくないし 生きられないよ
みんな いろんな人生あるんだから
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

あたし 何も悪いことしてないよ
だからさあ 冷ややかに見ないでよ
そりゃ あんたは幸せかもね
でも あんたの幸せを押し付けないでよ
あたしは あたしのところで生きてゆくよ
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

あたし 何も悪いことしてないよ
あたしの勝手して どこが悪いのよ
あたし 自分のことは自分で守ってゆくよ
空っぽじゃないんだから

そりゃ あたしだって温かさはほしいよ
でも温かかって冷たいんだよ
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

コンサート

職場の人たちの協力で、自分の歌のコンサートを年1回、4回ほどやりました。5回目は「みんなで歌おう」みたいな集まりにしたと思います。その第1回のために作ってオープニングで歌った『僕のコンサート』です。

僕のコンサート

春の陽ざしはおだやかに溢れて
残り雪を少しずつ溶かしてゆくね
春の陽ざしはやさしく肩たたき
眠りこけた動物たちを起こしてくれるね

僕のコンサートが 今はじまるのだから
思いのままに 歌いたいように

僕の心は大きく息をして
張り詰めた糸を少しずつほぐしてゆくよ
僕の心はもうすぐ動き出しそう
その動きを待っている
人たちの前で

僕のコンサートが 今はじまるのだから
感じたままに 踊るように

ギターをつまびきはあの時の寂しさ
僕の歌声はあの時の嬉しさ
僕の心はこの世にただひとつ
だから今こうして幕があこうとする

僕のコンサートが 今はじまるのだから

こころのままに こころをこめて

京都児相マンスリー…

コンサートといい、『京都児相マンスリー』といい、好きなことをやらせてもらっていました。自分の所属する児童相談所と京都府の他の児童相談所の職員に向けた勝手な広報紙で、私個人が発行責任者でした。

その第6号に載せた記事です。その頃流行っていたTVドラマの題名を貰いました。

男女6人旅物語

～石垣・西表・竹富三島めぐり～

13日の金曜日とはこのことだったのだ

朝6時30分、京都駅八条ロアバンティ前空港バス乗場にゆくと、所長が両手でX印をついている。何のXだろう。オレ以外はまだ誰も来てへんということなのか、バスの発車時刻は45分だから私が遅刻したということでもなからうし…バスがXだったのだ。係員が説明している。「名神で事故がありまして不通となっております。バスは運休ですのでJRで新大阪までおいでください。」最初からケチがついたという否定的評価や、いや、これで不吉さをパスしたという肯定的評価がとびかったが、飛行機も飛ばなかったらどっか別のところへ行こうかなんて言いながら、6人の「家族旅行」はJRからはじまったのである。

まだパッチを脱ぐほどじゃない

ホラ！と所長がズボンの裾をまくりあげて野口さんに見せたのがパッチ。JALで那覇空港に着いて南西航空のロビーへ。気温は24度。JALの中からさっそくセーターを脱いでシャツの袖をまくりあげた「順応的」な団さんは、ホラや

っぱり暑いと沖縄の温度を無理に上げているようだったが、所長はまだパッチを脱ぐほどじゃなかったみたい。石垣島は28度との南西航空の機内アナウンス。いつ所長がパッチを脱いだか、それは取材しそこねたが、ズボンを脱いでパッチ一枚であっちこっち見て回ったというようなことはなかったので、申し添えておきたい。

おフネはこんなに速く走るもんじゃない

とにかく凄かったんだから。あれを暴走族と言わずして何と言おうか。石垣島から西表島まで約1時間、時速40キロから50キロでおフネが走るのだ。おまけに、風速13メートル以上になると欠航するらしいのだが、この日はすれすれ11メートル。50人も乗れば満席になるぐらいの小さなおフネの窓は大波に洗われ、許されないくらいに揺れてくれる。最初は楽しい気分で歌を口ずさんでいたが、だんだん心地好くない内臓的感觉に襲われてくるのを拒絶するために、歌うために歌うことになってくる。前部のギャル客が係員に連れられてきて私の横に座り、袋を口にあてゲーゲーやりだした。後部の方がましなのだろう。こういうギャルはそばにいてほしくない。何故なんだ。何故そんなに私を攻めるのだ。新幹線なんかで横にギャルが座ってくれたためしなどないのに、何故私はこういう理不尽な状況におかれるのか。

運転手さんは天然記念物

西表島といえば、イリオモテヤマネコ。でも夜行性ということもあって、なかなかお目にかかれならしい。そんな話もしてくれた観光バスのガイド兼運転手さん、なかなかの話し上手でみんな大笑い。昔、「悲惨な戦い」という、相撲取りのまわしがとれてどうのこうのという歌を歌ってた、なぎら健彦にどこか感じの似てる御仁。その運転手さんの話してくれたのは、何年か前まで紅白歌合戦はVTRで正月にしか見

られなかったこと、西表の人口は1800くらいで「牛口」は2500くらいだということ、医者がおらずに急患が出たらヘリで石垣まで運ぶこと、西表に住んでいただけるのなら土地をタダでさしあげる、メインストリート沿いでも坪1200円、京都から中学生が単身で転校してきていること…。帰って女房に話すと、働かなくても暮らしていけるだけの資産があって、具体的には今度の9000万円のジャンボ宝くじに当たって、医者がいてハブがいなければ移り住んでもいいとのこと。ごもつとも。

御ハブ様はお現れにならなかった、よかった

マングローブ林の間を縫って流れる西表の浦内川。遊覧船で中流までさかのぼり、そこからマリウドの滝、カンピラの滝に至る細い山道。遊覧船のガイドはハブに気をつけなさいとか、ハブのことは一言も口にしなかった。口にすると客が怖くて歩を前に進めることができないからじゃないか。ハブが出てきたらどうしよう。団さんが先頭を歩いててオレは2番目。2番目が危ないとよく聞く。かまれたらどうなるのか。30分の内に血清をうたないと死んでしまう。俺をかっついで一番早くフネまで運んでくれるのは誰だろう。でも到底30分以内では事は進まない。それならこの川の急流に流されてゆけばどうか。それでも間に合わないだろう。ああ、妻と娘の顔が浮かぶ。こんなところへ来たばっかりに、もっと普通の職場で普通の旅行をするところに異動しとけばよかった。あつ、あの木のうしろに石が積んである。ハブに噛まれて死んだ人たちの慰霊碑だったら、もう決定的だ…滝を見てフネに帰り着いた時、飯野さんの小柄な姿が目飛び込んだ。涙がひとすじ流れた。

久木山さん、あわや神の国へ

あっ！久木山さん！しっかりせいとかかえあげ、怪我は怪我はござらぬか。カンピラの滝

が信光さんを飲み込もうとしたのも、今になってみれば笑い話。なんて言うてみたいが、何のことはない、岩の上でちょっと滑っただけ。みんなの心配をよそに、久木山さんが一番ショックだったのは缶ビールを滝に流してしまったこと。フネに帰ってきて、「缶ビール、流れ着いたらんか」だと。世の中そんなにうまいこといくか！

早朝ゴルフはとってもリッチな気分なのです

団さんは大学の体育でゴルフをやったというだけあって、まあキマッテル。久木山さんは力強く振り切ってる。でもそこに白いボールがそのまま。川畑くんはこれはゴルフじゃない、バットスウィングじゃ。できた写真を見てのコメントが以上。9ホールのミニコース。6時半起き、7時からのプレイは爽快そのもの。ホテルサンコーストはグリーンいっぱいのリゾートホテル。夕方、水面に光が放つてあるプールサイドでの語らい、星を見ながら、そしてハイビスカスの花を揺らし、その香りを運んでくる心地好いそよ風を受けながら、パンツの替えをバッグに入れてくるのを忘れて何処で買えるかを考えていたのも、それもわび。食事もおいしくて、やっぱりホテルサンコーストイズベターザンホテルミヤヒラなのだ。

海、空、そして花と蝶

昭和62年11月13日から15日までの京都児相ハイビスカス班の旅行は、デイゴ班(ホテルミヤヒラ泊)に比べてまず天候に恵まれ、素晴らしいものになった。海はエメラルド、空は快晴、人は温かく、タクシーは安い(300円)。石垣、西表、竹富、それぞれに趣が異なり、とくに竹富島では時間がそこだけゆっくり流れているように感じられ、咲き乱れる花、それに群がる大袈裟でなく20~30匹のあげはちょうは、私たちが神の国に近づけてくれた。みんな楽し

ザイコロジー⑤ (川畑 隆)

んだ。久木山さんが飯野さんの肩をもみほぐしているその光景は、まばゆいばかりであった。団さんと川畑が下痢をしていると知っていながら、その前で2個も3個もアイスクリームを食べる野口さんには、昼食に下剤を混入してやろうかと思った。「グアバ」を連発していた所長は、腕に「写真」という腕章を巻いていいほどの連写ぶりであった。最後の昼食には「タンタン」という肉料理の店でタンタンちゃんとヘレヘレちゃんを、おいしく、安く、多量に食べた。空港の戻し税（気分が悪くなって戻したら税金がかかる、というのではない）店で、お酒など買う人は買って、みんな満足して帰ったと、そういうお話なのであった。（『京都児相マンズリー』第6号 昭和62年11月）

テーマソング…

べつに頼まれたわけではなく勝手に作りました…『京都府児童相談研究会フェスタ』はその合宿のために、『今ここで』は京都府職労福祉労働支部婦人部へのプレゼントでした。

京都府児相研フェスタ

今 幕があがる
竜馬の船が帆をあげるように
赤銅色の夢たちが 明日を切り開こうと
Kyoto prefecture jisouken festa

子どもたちの
現在(いま)と未来が輝くように
昔の子どもたちこそ さあ いい顔で
Kyoto prefecture jisouken festa

やりたいことをやろう
やりたさを信じて

学びと遊びを分けたのは誰だ！
Kyoto prefecture jisouken festa

喜びつらさも
一人のなかに押し込めないで
小鳥のさえずりのように
語り合っていこう
Kyoto prefecture jisouken festa

やりたいことをやろう
やりたさを信じて
学びと遊びを分けたのは誰だ！
Kyoto prefecture jisouken festa

今ここで

あなたが寂しい時は 強く強く膝を抱いて
涙があふれるのなら 清水の流れるように
あなた 心が生きてます
わたし 心が震えます
今ここで 今ここで あなたのままで

思わずこぶしを握る 願いは胸中めぐって
わかってほしいから 言葉がほとばしる
あなた 心が生きてます
わたし 心が火照ります
今ここで 今ここで あなたのままで

よかったこと抱きしめて 街が優しく映る
身体が波打ってくる
止めるなんて無理なこと
あなた 心が生きてます
わたし 心が弾みます
今ここで 今ここで あなたのままで

2024.04